

チャヴィン省のクメール・クロム ——1995年夏のメコン・デルタ農村調査報告——

高田洋子

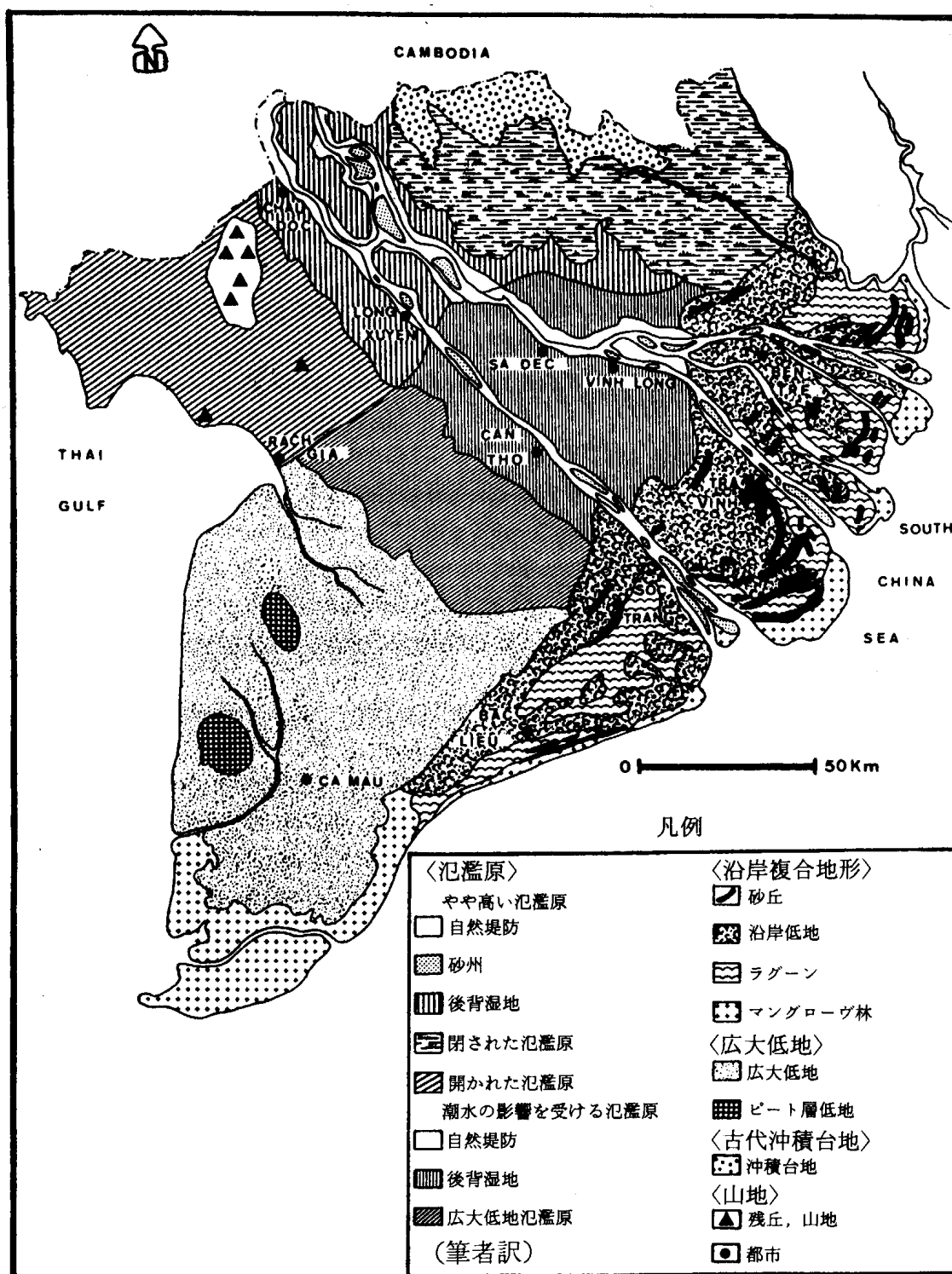
はじめに

本稿は、「メコン・デルタ農業開拓の史的研究」（平成7年度文部省科学研究費補助金国際学術研究）による成果の第2報告である。¹⁾ 筆者は、当年度の現地調査の成果を、デルタの氾濫原地域における農業開拓の状況を中心に本誌前号（1995, No.5）にすでに発表している。ここではその続編として、氾濫原と並ぶデルタの重要な地形区分である沿岸複合地形における農業の現状を、チャヴィン省の調査に基づいて報告したい。

デルタの沿岸複合地形は、南シナ海に面したメコン河河口流域にみることができる。それらは現在、流域の東側から順に、ゴコン、ベンチェ、チャヴィン、ソクチャン、そしてミンハイの5省にみられる。なかでもチャヴィン省には、沿岸複合地形に典型的な砂丘列が最も多く発達し、また広大な沿岸低地、窪地そしてマングローブ地帯などが存在する（図1参照）。

チャヴィン省の十分に発達した砂丘列の上には、デルタの先住民族とされるクメール・クロム（Khmer）²⁾の社会が分布する。現在、ベトナム領に居住するクメール族は約90万人である。その大部分が、メコン・デルタの3省すなわちカンボジア国境のチャウドック省とハウザン河の河口流域のソクチャン省およびチャヴィン省に集中している。チャヴィン省の総人口（約95万：1994年現在）に占めるクメール系住民の比率は28.8%であり、

図1: メコンデルタの地形区分



出所: [Nguyen Huu Chiem, "Geo-Pedological Study of the Mekong Delta," 『東南アジア研究』京大東南アジア研究センター, 第31巻2号, 1993, p.161から作成]

この比率は3省のなかで最も高い。つまりチャヴィン省の農業社会は、特徴ある地形における農業開拓の技術的側面のみならず、開拓に携わったベトナム人とクメール人（さらに中国人）が形成するメコン・デルタ多民族社会の解明にも、興味深い材料を提供する。

クメール・クロムの人々は、雨季の降雨により浸水する低地は避けて、元来乾いた砂質土の上に村落を形成したと言われる。一方の沿岸低地では、前編で述べた氾濫原と同様に、歴史的にみれば新参のベトナム人が中心となって新田開拓を行なった。しかし近年、このような状況は変化しつつあるようだ。本論では、筆者が視察したクメール人による低地農業開拓の事例を紹介しながら、沿岸複合地形の農業問題とデルタの多民族社会について考察したい。³⁾

ホーチミン市からメコン・デルタのミトーにむかって車を走らせ、ティエンザン河をフェリーで渡ると、ベトナム人入植の歴史の古いヴィンロンに着く。ヴィンロンの街から東南に下ってチャヴィンに近づくにつれて、街道にはクメール・クロムの木とされるヤオ（Dao）とサオ（Sao）の並木が大変に印象的である。

私たちがチャヴィン省庁を訪ねたのは、8月10日の午前であった。渉外課のグエン・ヴァン・チュオンさん⁴⁾の対応はてきぱきとして気持ちよかった。同省の農林業局長ダイさんの手配により、私たちはチャヴィン省の3つの村（図2を参照）を調査することができた。以下では、まず(1)でチャヴィン省農業普及センター長のチエットさん、土地局副局長のタインさん、水利局のタイさんをそれぞれの役所に訪問してヒヤリングした内容をまとめて、沿岸複合地形の典型例としての同省の農業を概観する。次に(2)では、現地調査を行った3農村の実態を詳しく述べ、最後に(3)で現地調査から考察したことをまとめたい。

筆者の調査チームは、チャヴィン省の1村落を対象にして、よりインテ
ンシヴな農村調査を来年度に実施する予定である。本稿は、その予備的作
業であることを、あらかじめお断りして置きたい。

(1) 沿岸複合地形における農業

A) 地形と土壌、潮汐の影響

ティエンザン河は南シナ海に近づくにつれ、大きく東に蛇行して3本の
支流に分かれる。その一番南のコチエン川とハウザン河に囲まれる大きな
砂州の上に、ヴィンロン省とチャヴィン省が位置している。ベトナム戦争
終了後、統一ベトナムがスタートした時に両省はクーロン省として統合さ
れたが、1992年から再び1975年以前の2行政県に分離された。⁵⁾

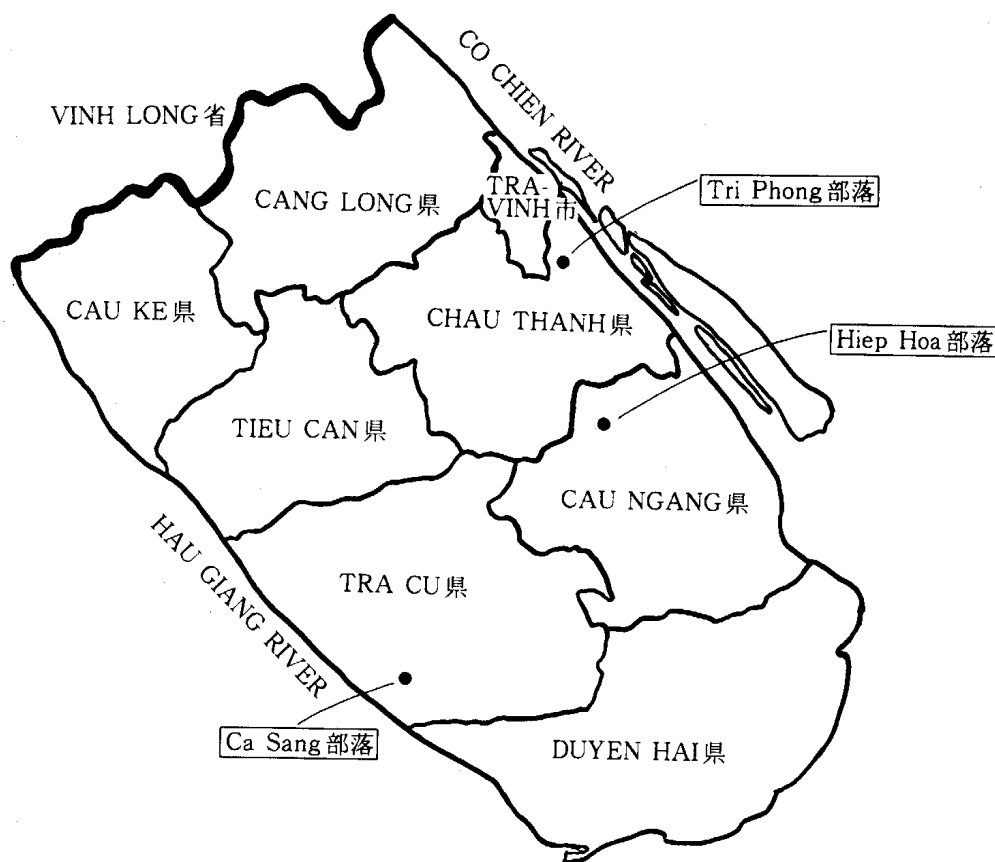


図2: チャヴィン省7県と調査部落の位置

南シナ海に臨むチャヴィン省の地形は、ヴィンロン省と異なる典型的な沿岸複合地形である。その内部は、次の4つの部分から構成される。まず(1)砂丘(Sand ridges)は、海岸線にほぼ平行に、弧を描いて途切れがちに形成される。海拔2mから5m、幅は500mから2km、長さはわずか5mのものから40kmにおよぶものなど、その形態はさまざまである。(2)砂丘列より陸側の沿岸低地(Coastal flats)は海拔1mから1.5mの平地である。海水は直接には浸入しないが、乾季になると地下の毛管現象により塩分が地表に表出する。雨季の浸水は、10月に最大の0.2mから0.5mに達する。⁶⁾(3)ラグーン(Inter-ridges)は砂丘列に挟まれた窪地で、海拔0もしくはそれより低い。ここは潮汐の直接の影響を受けて、乾季の11月から4月まで海水が浸入する。

一般に沿岸複合地形の低地は、作物の生育には問題の大きい酸性土壤である。しかし地域によって、土壤の毒性は雨季の大量の降雨⁷⁾のおかげで真水に洗われ、地表はもとの沖積土によみがえる。⁸⁾

潮汐の影響を受ける地域は、省全域の低地の90%(134,900ha)に達する。河川による海水の浸入は、12月頃からコチエン川沿いのフンミー(Hung My)村とハウザン河側のチャハー(Tra Kha)村の両地点で始まる。乾季の終りの4月頃には、ハウザン河のコウカン(Cau Quan)まで海水が遡上し、内陸に浸入する。しかし雨季に入ると、6月には降雨とともにメコン河の水量が増し、潮汐の陸地への影響は海岸部に限定されるようになる。省内の水路の3分の2が酸性で、干満の差を伴う。ヴィンロン省境のカンロン県を流れるカウケー川のみが、省内に稀な年中真水の川である。

B) チャヴィン省の農業

同省の農業は、前述の地形と土壤、および潮汐の影響の諸条件に大きく左右される。とりわけ潮汐の影響は深刻である。通常、次の3段階にわけ

てその状況が説明される。

- (1) 潮水の影響が最も深刻な地域＝水路の水が塩分4g/リットル以下の濃度に下がる期間は1年のうち3カ月以内もない地域。それは省全体の17%を占める。臨海地帯のマングローブ樹林帯や窪地。そのようなところでは漁業および塩田が生業である。乾季の川は水深50cm程となる。その時灌漑水はEC値が10g/リットルから最大18g/リットルまで上がる。
- (2) 潮水の影響が6カ月から8カ月間つづく中位の地域。沿岸低地に多く、面積では省全体の約26%程である。1期作の水田、もしくはコメと魚、えび・かになどの養殖を組み合わせた生産活動を行う。
- (3) 潮水の影響の比較的軽度の地域とは、乾季の2カ月から5カ月間だけその影響を受ける土壌である。塩分濃度は4g/リットルから10g/リットル程度である。比較的標高が高く、海から離れた平地にみられる。主として雨季のコメ1期作、もしくは伝統品種のコメと栽培期間の短い夏秋稲の2期作も可能である。省全体の約50%に相当する。

第1表：各地のコメ生産状況(1990年) ha・ton

県名	年生産		冬春稲		夏秋稲		雨季稲	
	面積	生産量	面積	収量	面積	収量	面積	収量
カンロン	32,527	113,606	9,524	42,713	14,361	40,088	8,642	30,805
カウケー	27,905	107,022	5,450	25,506	14,048	52,744	8,407	28,772
ティエウカウ	19,327	65,612	4,435	18,828	7,281	21,644	7,611	25,140
チャウタイン	22,253	60,750	638	2,066	4,782	9,867	16,833	48,817
チャー	19,556	56,781	890	3,133	2,649	8,289	16,017	45,359
コウガン	15,246	41,818	—	—	2,171	6,390	13,075	35,428
ズエンハイ	3,679	9,420	—	—	171	522	3,508	8,898

出典：Vu Nong Nghiep-Tong Cuc Thong Ke So Lieu Thong Ke Nong Nghiep 35 Nam (1956-1990), 1991, Hanoi, p.586.

第1表でチャヴィン省各県の米作状況を見ると、ヴィロン省境に位置し潮水の影響の軽度であるカンロン、カウケー両県の生産量が比較的大きいことがわかる。これに対して砂丘列が多く低地に潮水の影響を受ける中部や、マングローブ地帯を含む臨海部の諸県は米田面積も生産量も少ない。

また、乾季に灌漑水路の施された土地でつくられる冬春稲と作付け期間の短い夏秋稲（新品種）の栽培も、先の北部2県とそれに隣接するチャウタイン県に多い。一方、高い畦で田を囲み、雨季の初めの降雨によって土壌の塩分を洗浄して田植を行う伝統的な雨季稲は、南部の諸県に一般に多い。因に、後述する私たちの調査した地域は、チャウタイン、コウガン、チャクーのこれら中南部3県の部落であった。

畑作は、砂丘上とハウザン河沿いの南部諸県で盛んである。多種類の野菜や甘蔗、とうもろこし、さつまいも、かぼちゃ、キャッサバなどが栽培される。

戦後、ベトナムの中央政府とクーロン省政府は、低地の土地改良のための運河建設を推進してきた。運河掘削の目的は、(1)真水による灌漑および(2)交通手段の確保であり、さらに川や運河に水門を設置する事によって潮水の浸入を堰止める方法も取られている。ヴィロン省のマンチェップ川をはじめ、チャヴィン省内のカンチョン、カイホップなどの自然河川から幹線、副幹線運河が砂丘や沿岸低地を貫いて建設されている。完成した1,876kmの水路周辺では、小農民による新田開発がすすめられている。

水路の掘削によって、農地の総面積は現在236,932haに増大している。しかし半分以上の134,900haの土地には、依然として潮の影響がある。土壌はph.3.5からph.4.2の酸性のため、農業の生産性は低い。チャヴィン省の農業の発展は、技術的にはまずこの問題の解決にかかっているようである。

(2) チャヴィン省農業開拓の現場から

A) チャウタイン(Chau Thanh)県ホアトアン(Hoa Thuan)村

i) 村(Xa)の人民委員会での聞き取り

第一の調査地は、省都チャヴィンの東に接するチャウタイン県ホアトアン村であった。同村の東はコチエン河に面し、南の境はチャニュー村(旧クォックハオ村)、南東は旧フンマイ村に接している。チャヴィン市の中心から村役場のある地点まで、約3キロしかない。同村の人口は16,364、戸数は3,270戸である。住民の大部分は、コチエン河と平行に走る大きな砂丘上に居住している。地図から判断して砂丘の幅は最大約500m、最小約100m程、また距離は約5km程であろうか。村内の標高はほぼ約0.7mから3.3mの範囲だが、場所によって最高3.6mの地点もある。

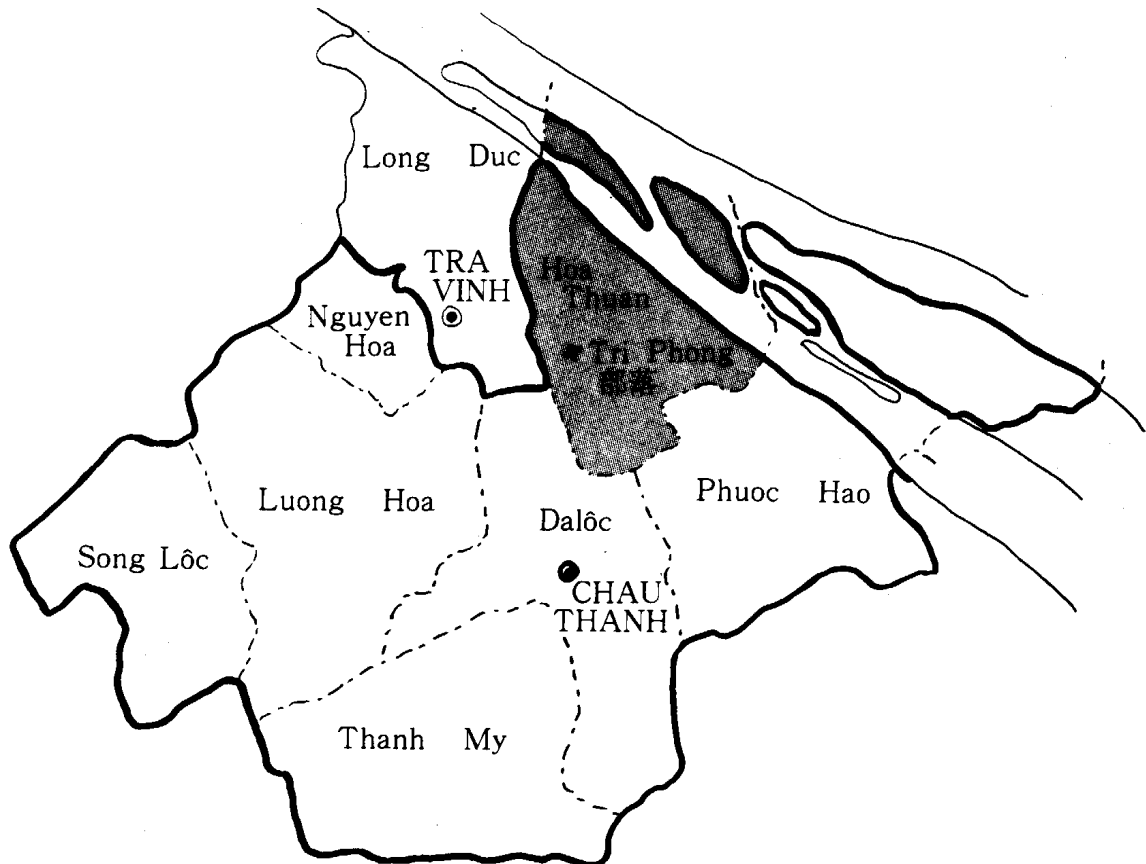


図3 チャウタイン県の7村(1992年)

村の人民委員会での説明によれば、ホアトアン村は10部落（Ap）から構成される。村の沿革は未調査であるが、村の幹部の話では、クイノン Quy Nong 部落は、以前は隣の旧フンミイの村域に属していた。またヴィンロイ Vinh Loi 部落は、昔のヴィントゥアン Vinh Thuan, ホアロイ Hoa Loi 部落が合併したものである。

民族状況は、全村の約40%がクメール人である。西方のチャヴィン運河に注ぐヴンベック川から南の砂丘上に位置する5つの部落、つまり南から順にクイノン Qui Nong A・B、チホン Tri Phong, ダカン Da Can, ビックチ Bich Tri の部落では、クメール系が住民の多数派を占める。村で最大のクメール寺院はクイノン部落にあり、そこは住民の100%がクメール人である。これに対し村の北部及び、村の最南端の Da Hoa 部落はほとんどがベトナム人である。

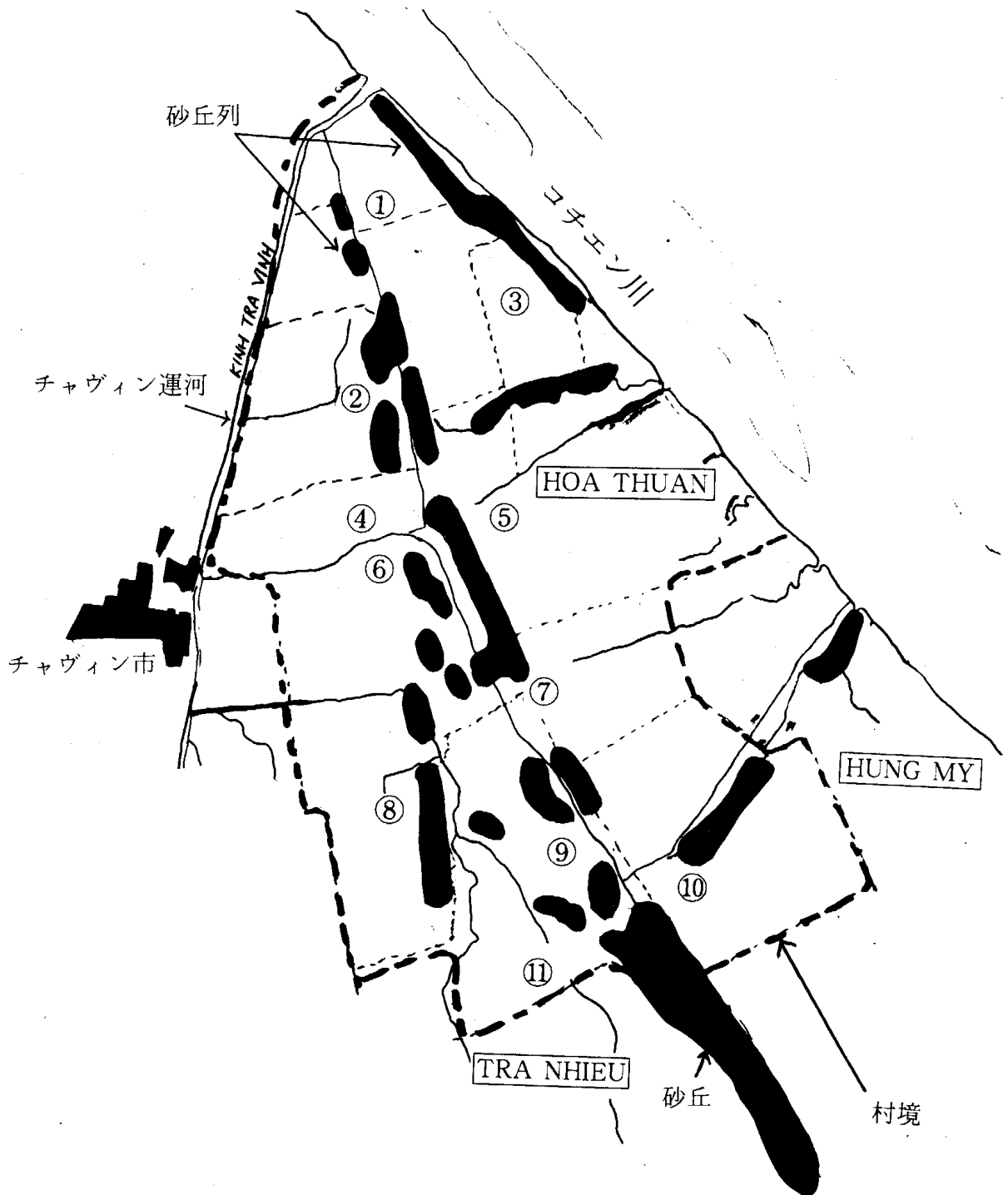
第2表：1995年ホアトアン村農業税運動の成果

部落名 Ap	農地使用税		水利税		
	計画 kg	達成率 %	計画 kg	達成 kg	%
① Vinh Bao	7,668	98.9	—	—	—
② Xuan Thanh	34,708	99.4	—	—	—
③ Vinh Loi	23,953	45.3	—	—	—
④ Ky La	31,637	96.4	—	—	—
⑤ Bich Tri	20,347	97.6	—	—	—
⑥ Da Can	13,740	98.9	1,558	865	55.5
⑦ Chan Mat	26,209	98.9	—	—	—
⑧ Tri Phong	40,239	98.7	4,835.8	1,391	28.7
⑨ Quy Nong A	9,918	97.5	1,144.4	634	55.4
⑩ Quy Nong B	19,697	98.2	3,365.8	1,791	53.2
⑪ Da Hoa	16,126	98.9	2,495	956	38.3
計	244,254	98.7	13,399	5,637	42

(ホアトアン村人民委員会の黒板より筆写)

村の農地面積2,110haのうち、米作地は1,586ha、野菜畑は475haである。第2表を参照されたい。農地使用税を最も多く支払った部落は、チホン、スアンタイン、キラなど村の西側で、運河沿いの部落である。農地使用税は保有地面積と農地の生産性によって細かく定められている。また水利税を支払うのは、1986年頃から掘削された水路付近の新しい入植地のあるウンベック川の南、かつ砂丘の西側の地域、すなわちダカン、チホン、クイノンA・B、ザホアの5部落に限られていることがわかる。これに対しコチェン川沿いの部落は、乾季に浸入する潮水の為に雨季1期作の伝統品種が栽培されている。

同村の農家を、人民委員会の役人は次の4階層に分類して説明した。それによれば(1)富農556戸(17%)、(2)中農967戸(29%)、(3)貧農1009戸(31%)、(4)土地なし層・農業労働者748戸(23%)である。この分類による「貧農」層は、1年に3カ月から6カ月間は食料不足状態、また、「土地なし」層は1年中食料不足に悩まされている。村内の1農家の平均土地使用規模は、部落毎に異なる。例えば、ヴィンバオ部落は最大でも1.5haであるという。



ホア トゥアン
図4 HOA THUAN 村の各部落の位置
(マル数字は第2表 部落番号と一致する)

ii) チホン部落での聞き取り

農家のヒアリング調査のために訪れたのは、チホン部落⁹⁾であった。部落の全戸数は318戸で、80%以上がクメール人である。部落長のタック・ニュ・フン Thach Nhu Hung さん（59歳、クメール人）によれば、この部落は行政上7つの集団（To）に分かれ、各Toはそれぞれ30戸から40戸以上で構成される。

同部落の1農家あたり土地使用規模は、平均0.7haである。そのうちに占める水田面積は平均0.4haから0.5haである。最大保有規模の2.5haの農民がいる一方で、土地なし層は71農家（全体の2割）である。土地を持っていない者の多くは村外からの新参者であるか、または昔に大地主のタディアン（小作人）であった人たちだという。1975年以前には名義は家族の成員のそれぞれに分散させているのが普通で、実際には1家族全体で16haを越す土地をもつ者もいたという。

現在は、逆に土地の細分化はどんどん進んでいる。例えばフンさんの父親は以前は10haの土地所有者であった。7人の子どもに相続したので、フンさんの保有分は1.5haとなった。フンさん自身が彼の子どもたちに分け与えることのできる土地は、ほとんどわずかしかないという。

さて、チホン部落の入口には、立派なクメール寺院（ワット・コンチェイ Kong Chey）が建っていた。7世紀もさかのぼるこの寺の建立の歴史が書かれたヤンの葉の文書もあるそうだ。今ではベトナム語に訳され、寺に保存されているという。寺院のそばの道を歩き、竹でおおわれた小道には行って目的地のToに向かった。小道のなかは熱帯の強い陽射しが遮断され、さらさらと白っぽい砂土がくねくねと続く。道にそって日常品をあつかう小さな万屋や、クメール人のヤンの葉と竹製の家々、また煉瓦と漆喰壁のベトナム人の住居もある。

インタビューに応じてくれる予定のトン（San Ton）さんの家に着いた。家は小道が途切れて竹林から出た砂丘のはずれに立ち、そのむこうに

なだらかな斜面が続き、さらにその先に低地が続いている。低地は灌漑水路がひかれ、新しい開拓地、水田地帯が広がっている。トン夫婦は現在0.8haの土地を耕作している。彼は水路の掘られた低地の田圃と家の周囲の微高地で畑をつくって生活する。畑には果樹（ドリアン・ココナッツ・バナナなど）やトマトのほか葉物の野菜を栽培しているようである。

土地を保有した経緯を訪ねると、話はまず彼の祖父母がいずれもクメール人で、20haの土地を持っていたことから始まった。5人の子どもに分け与えたので、トンさんの父は4haの土地所有者となった。しかし父にはトンさんを含めて7人の子が授かった。父は土地を8つに分け、7人の子どもに均分相続させた。一人あたり0.5haであるが、一地片0.5haは祖先の墓を守るために残したという。これはベトナム人社会ではよくみられる香火土（田）である。トンさんの母はベトナム人だった。意外なことに、トンさんの母はクメール語はできなかったそうだ。他方でトンさんの妻も妻方から0.3haを相続したので、結局夫婦は現在0.8haの土地使用権を保持することになった。トンさんもまたフンさんと同じく、彼が子どもたちに相続させることのできる土地は、意味のないほどの小地片でしかないと嘆く。

フンさんについてきたこのToのベトナム人レ・ヴァン・サン（Le Van Xan）さんも進んでインタビューに答えてくれた。彼のベトナム人の両親はこの部落に住んでいたが、クメール語を解さなかった。サンさんは子どもの時からクメール寺院でクメール語を学んだ。彼は村に土地は持っていなかったが、サンさんの息子が戦死したので、政府から1989年に、0.4haの土地を支給されたそうだ。それはもとの部落の共有地の一部だったという。現在、彼はその土地で米をつくっている。

クメール人とベトナム人の伝統的な稲作技術は異なるといわれる。トンさんに彼の農具を見せてもらった。刈り取りの道具はディエウ（Dieu）と呼ばれる（5図参照）。ベトナム式のものVong hai (Vong gat)と比べて曲線的で刃の鉄製部分が小さい。クメール人の稲作の場合、苗代期間が三カ

月と長期である。一般には肥料や農薬は使わない。ただし五年ほど前から高収量品種が導入されはじめた。今でも2頭立ての水牛に鋤を引かせ、在来の品種にこだわる人が多い。しかし部落の西部地区にひかれた新しい運河のおかげで、砂丘の下の低地に運河から水路を掘り進み水田耕作ができるようになった。トンさんは積極的に低地に降りて開拓に挑戦したクメール人のひとりである。

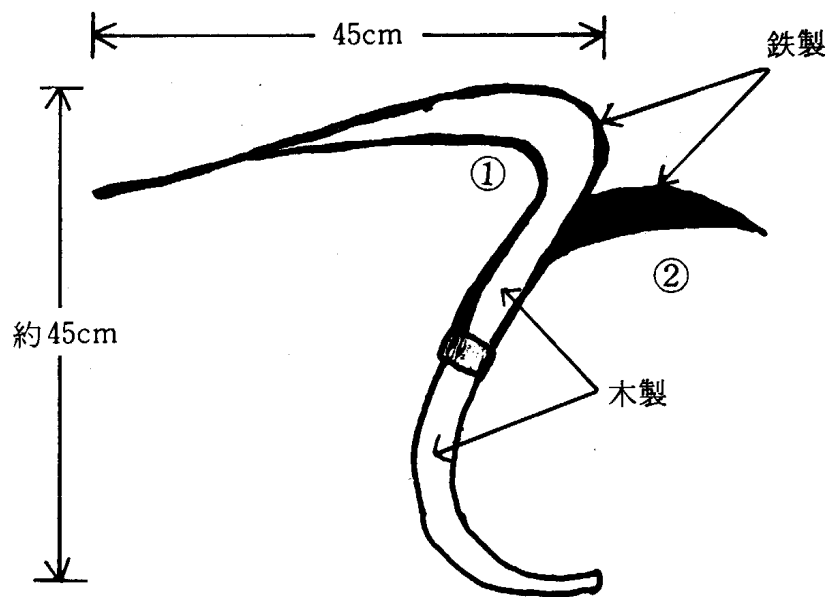


図5: クメール人の刈取り用の農具 Diêu

中心の本体に黒色の鉄部が裏にはりつけてある。まず下の取手を持ち、①の曲部の内側で稲束を把えて、左手でその束の根元をつかみ、次に②をまわして束ごと切断する。

部落内に成年男子を余り見かけない。訳を尋ねてみると、労働者として出稼ぎに出かける者たちが多いという。軽労働の場合は日当15,000vd(ベトナム・ドン；1vd約100分の1円)、重労働なら30,000vdの稼ぎになるという。さらに重度の高い土堀などの仕事は1m³あたりの単価で支払われるらしい。

B) コウガン(Cau Ngan)県ヒエップホア(Hiep Hoa)村

i) 県・村の概要

チャヴィン市から国道54号を南に下ってコウガン県にはいり、キムホア村を過ぎると、そこはヒエップ村である。村役場でコウガン県の人民委員会副議長のムンさん、同村の農業課課長のケーさんたちが待っていてくれた。二人から、コウガン県及びヒエップ村の概況を聞く。

コウガン県全体の水田面積は20,000ha、畑作地は3,000haである。稲作は在来稲16,500ha(生産性は3ton/ha)、夏秋稲3,500ha(同3.7ton/ha)という。同県の西部は1980年ころから活発化した運河の掘削工事のおかげで2期作地が増え、生産力が上がってきた。これに対し、東部およびコチエン川ぞいの地域は全体に生産力が低い。東部地区の土地利用は a) 低地で米1期作, b) 砂丘上は野菜栽培, もしくは居住地・道路用地, c) 自然河川水を利用したエビ生産地にわけられる。

県の人口の35%はクメール人である。同県の西部にあり砂丘列が走るヒエップホア村は、人口8,870のうちクメール人は61%を占める。コウガン県内ではこの比率は高い方だ。稲1期作の田は541ha、2期作地は600ha。野菜とコメを輪作する土地150ha、野菜と甘蔗などの畑作地80ha。水利事業の推進により、これからも県内のコメの2期作地が増大することが期待されている。

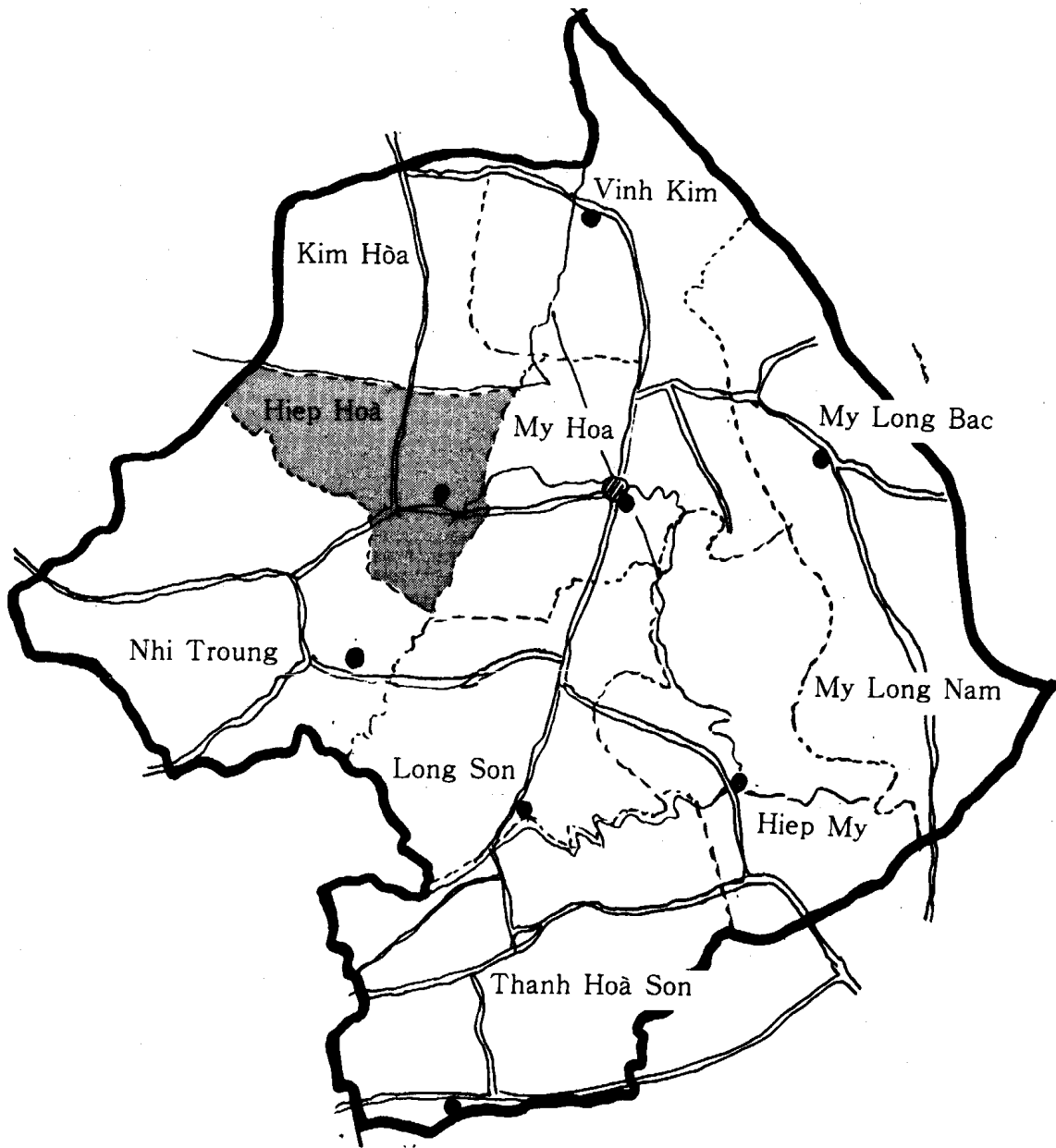


図6 コウガン県の10村と道路網

しかし、その際に問題となる点がある。たとえ運河が掘られても、クメール人を砂丘から運河周辺の低地に入植させることが難しいからだという。

ヒエップホア村は7つの部落から構成される。1975年以前には12部落が存在したが、このうち5つは分割されて他の7つに吸収・再編された。さ

らに1983年からキムホア Kim Hoa 村（1975年以前は Bao Hoa 村）の一部がヒエップ村に合併された。

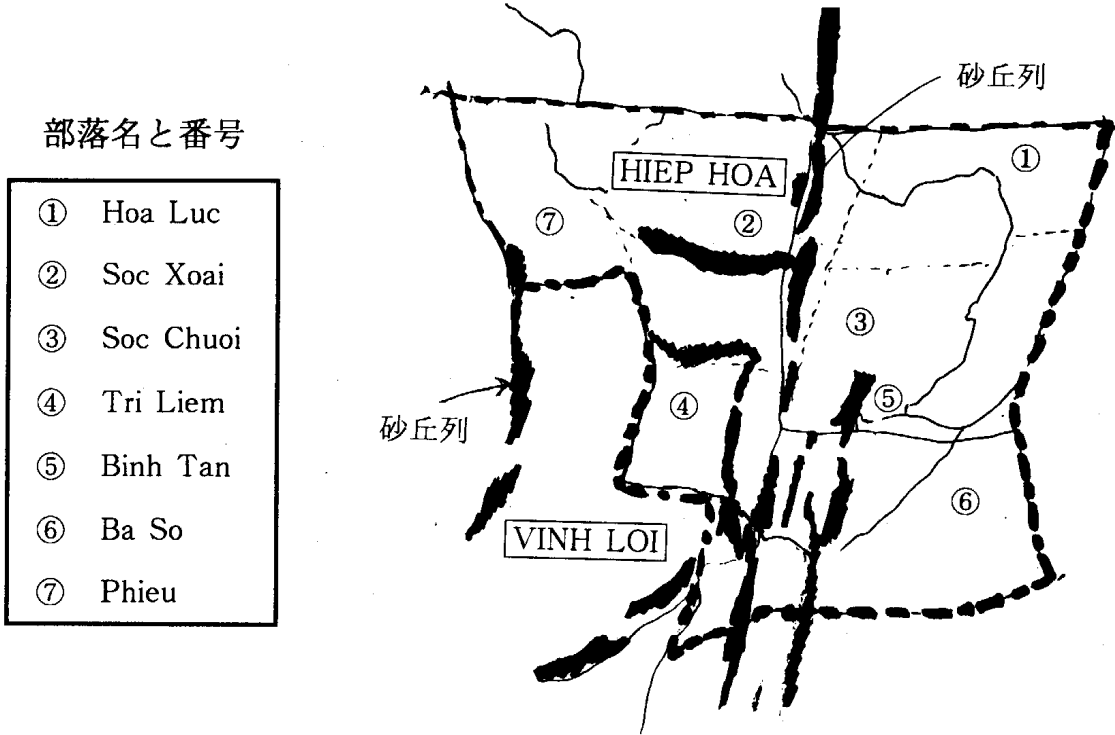


図7 Hiep Hoa村と各部落の位置

ii) ソックソアイ (Soc Xoai) 部落の開拓農家

村役場から南に向かい、部落を南北に走る道路（図6参照）から砂丘（図7参照）に沿って右折する道にはいる。やがて砂丘がきれるあたりから、一面の低地湛水地帯に入った。車を降りて盛り土された小道を歩く。行く手に菩提樹のみごとな巨木が見えてきた。小道の右手は微高地になり、樹木が道に沿って一列に植えられている。そこを右にはいると、サイ (Thach Say) さんの入植地である。私たちは低地に移住したクメール人農家のサイさんを訪れることにした。

彼は1949年生まれ（46歳）のクメール人である。祖父母は同部落のクメール人。母方の祖父母はチャヴィン市近くの Luong Hoa が出身という。奥さんの父はここから100km離れたチャクー県のロンヒエップ Long

Hiep村出身、母のほうはソックソアイ部落に生まれた。サイさんの家族は、妻と17歳の長男を筆頭に子供5人の7人家族である。¹⁰⁾ 彼らは1990年に、近くの砂丘上から移住した。

伝統的に丘の家を好むクメール人は、低地に降りて浸水の危険のある田圃づくりに普通はかなりの抵抗を示すという。私たちは入植の動機を尋ねた。サイさんの父は3haの土地を保有していたが、子供は11人。サイさんは土地を相続できなかった。妻の両親も1haの土地しか持っておらず、二人は決心して低地の開拓に臨んだという。

開拓資金は知り合いから借りて、後は自力で調達した。入植当初は、漁業からはじめて徐々に田畑は準備した。現在は全部で約1haの土地に、低地でコメ2期作のほか家の周囲に畑をつくって果樹、野菜など多種類の作物を試験的に栽培している。乾季には潮水が上がるので、コメの3期作は難しい。サイさんは兵役中のベトナム戦争でカイライやベンチェにあった果樹園を見たことがあった。その経験が現在の挑戦の下地になったという。タオ、バナナ、グアバ、キャッサバ、甘蔗、ユーカリ、チリその他の野菜が、所せましと植えられていた。

農地使用税を200,000vd、水利税を2kg/0.1haの割で、0.7ha分納める。彼らは現状に満足しているようだ。砂丘の上は人口圧が高くて、土地がない。努力の甲斐あって、これからは政府の融資を4,000,000vd受けることができる、という。

C) チャクー (Tra Cu) 県ハムヤン (Ham Giang) 村

i) ハムヤン村の概況

ハウザン河に面したチャクー県のハムヤン村の村名は、19世紀半ばの漢文史料に見いだすことができる。現在、村には農家総数2,840戸、人口13,967人、9部落が存在する。南の村境を流れるヤムライ Gaim Ray 川 (ハウザン河に注ぐ) 沿いのカホム Ca Hom 部落は、この村で開拓の最も古い

地区であるという。人口の85%がクメール族、12%はベトナム（キン）族、残りの3%は中国系である。

民族別の人口比から推察されるように、ハムヤンの日常世界はクメール語が卓越する。たとえ民族的に100%キン族であっても、ベトナム語よりクメール語の方を普段は多く使っている。中国系の人でもクメール語がうまい。ベトナム人が、クメール人と結婚するのは珍しくない。役場でこの話をしてくれた村の人民委員会主席のタインThanhさん（36歳）も、曾祖父さんは中国人だという。村には4つのクメール寺院と廟がある。

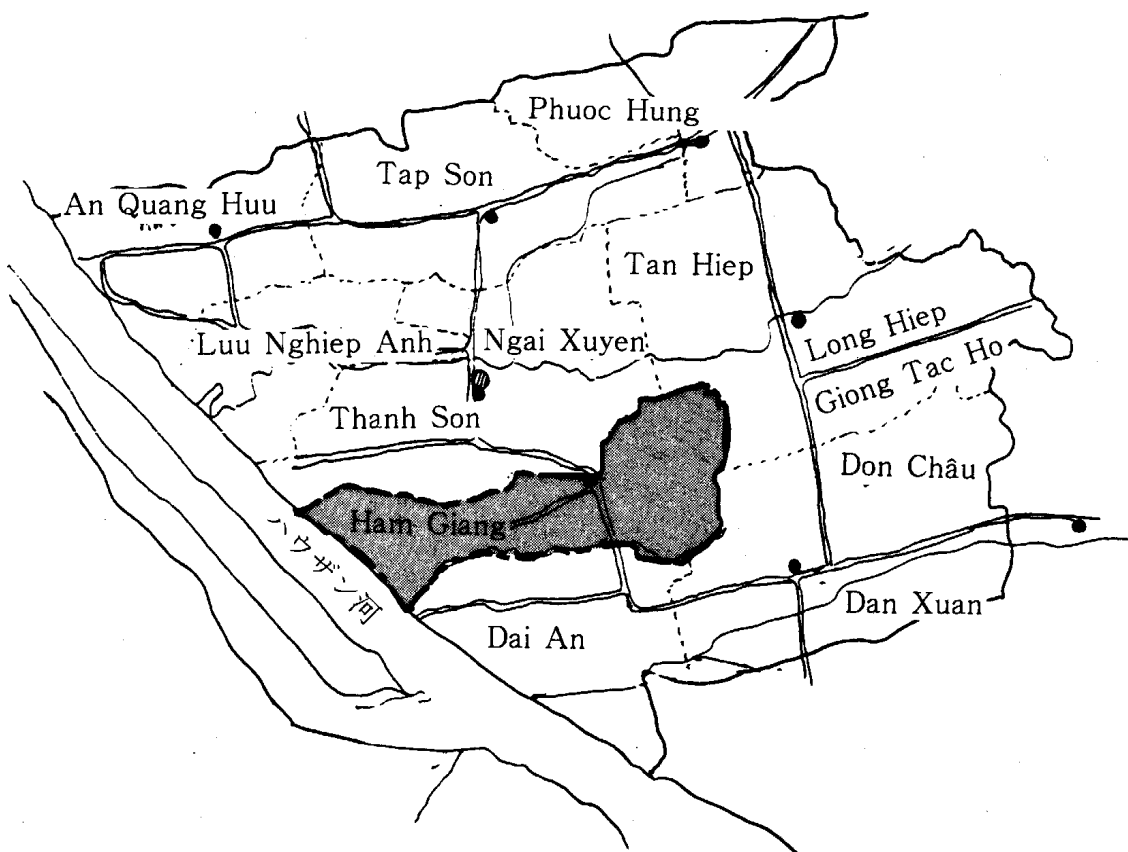


図8: チャクー県の13村

農地総面積1,787haの内訳は、水田1期作が50%、2期作が30%、畑作地20%（ココヤシ10%、甘蔗10%）である。村の東部は野菜2期作とコメ1期作の組み合わせのところが多い。1989年に完成した水路沿いは、現在は

コメの2期作地に変貌した。また新しい水路に近いところでは、エビの生産も始まった。海岸低地の稲作は、高い畦を築いて田を囲み、雨季の水を十分貯めてから、田植をする。従って在来品種のコメを栽培している。

西部地区は、酸性土が多く、コメ1期作か甘蔗の畑にする。砂丘上では、コメと野菜を栽培する。ココヤシも多い。甘蔗の加工のための砂糖工場は、村に合計5つあり、他県にも出荷している。

ハムヤン村の部落名

(西部)	(東部)
① Ben Ba	⑤ Ca Toc
② Vam Rai	⑥ Nhue Tu A
③ Ca Hom	⑦ Nhue Tu B
④ Ca Sang	⑧ Tra Tro A
	⑨ Tra Tro B

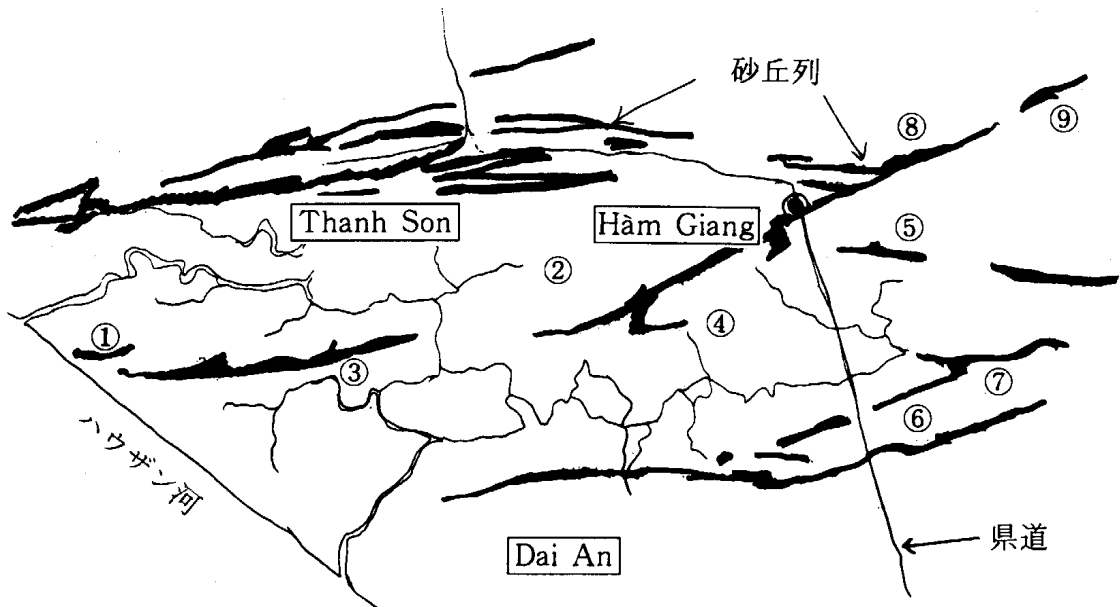


図9 Ham Giang村の各部落の位置

ii) カサン (Ca Sang) 部落の開拓農民

タインさんの手配により、カサンの低地に移住したクメール人農家を訪ねることになった。村の中心部 (図9参照) の喫茶点でヤンの生ジュースを飲んでひと休みしてから、砂丘の上の道路を東に少し走る。そこで右折して砂丘に対して直角にのびた道にはいる。盛り土をしてつくられた幅6mほどの道の両側は、一面の低い水田地帯である。満々と水を貯めて大池のような水田の中に、黄色く実った稲穂が絨毯のように浮かんで見える。おそらく農業労働者の仮住いであろう、ニッパヤンの小屋が今にも浸水しそうな畦道の上に立っている。その前で私たちにしきりに手をふる男たち。

すぐに低地をつっきると、林や集落が立地する微高地 (砂丘) にぶつかる。右折して微高地の縁につくられた小道にはいる。小さな集落が見えてきた。集落の中で小店を経営しながら、農園を開墾している40代半ばの夫婦を訪ねた。集落をぐるりとまわって、裏の農園に案内してくれた。彼によれば、1975年以前にはこのあたりは雨季には腰までつかるほど浸水していた。容易なことでは開拓できない、未利用の土地ばかりだった。戦後になって運河が開通すると、カサンの砂丘の上の部落から人が少しずつ移住してきた。彼や妻の両親、親族もカサン部落の人々だ。

初めは周囲を盛り土した池に水を貯めて、エビを養殖した。やがて南にある自然の川に排水路を引いて、開墾が始まった。1982年以降は、盛った地片の上にトマト、チリなどの野菜栽培が試みられるようになり、市場に出荷するようになった。今では収益も良いらしい。畑のそばには大池があり、そこから幅50cmほどの水路が向こうの大池につないで掘ってある。この細い水路に仕掛けられた竹籠の中には、小エビが捕獲されていた。市場に出せば1kgあたり25,000vdの収益になるそうだ。近くには在来品種の雨季作米も育っている。畑と池と田圃のそれぞれの境には、ココヤシの樹木が一行に植えられて、そのうちの何本かは実をたわわにつけていた。

(3) 調査事例をめぐる考察

以上、(1)でチャヴィン省の農業を概観した上で、(2)では個別の村や部落に入って農民から直接に話を聞いた。インタビューの応答の内容は、調査後にまとめていく過程で、矛盾や不十分な点を痛感する。しかし、筆者は受け取った事実をできるだけそのままの形で記録した。また、調査に「色めがね」はつきもののようだ。設問自体が、予定された事実を引き出すべく、あらかじめ組み立てられた分析枠組みのなかでしか発せられない危険が常に存在する。次回の調査では、ヒヤリング内容を十分検討して、また点としての各農民への聞き取り調査を量的にも面の調査へ充実させ、「ある一定の傾向性」の把握に努めたいと思う。現在のベトナム側の社会的状況は未だ定着調査を許可する段階ではないため、それにも実は限界はある。調査の方法は、今後も試行錯誤して改善していくしかない。

では最後に、調査の諸事例を手がかりにして、次の4つの問題に絞ってチャヴィン省の農業開拓を歴史的視点も含めて考察したい。すなわち、i)行政組織、ii)異民族の混在、iii)開拓の技術、iv)砂丘村落の人口圧の諸問題である。

i) 行政組織

今回は地方の行政組織そのものを調査のテーマとしたわけではない。しかし派生的にだが、筆者はチャヴィン省の行政単位の実態を知ることができた。メコン・デルタの地方組織は、省Tinh一県Huyen一社(村)Xaの各層から構成され、公的機関としてそれぞれのレベルごとの人民委員会および行政府をもっている。私達の調査から、Xaの下位レベルに農村の自治組織としてAp(部落)、そのさらに下位にTo(隣組と訳せるだろうか?)の地縁集団が機能していることがわかった。

3つの調査地の平均をとれば、Xaは人口10,000前後から16,000前後の

規模、1村落の農地規模はほぼ1,000haから2,000ha程度であった。また、一つの村落には平均10部落前後が含まれた。一つの部落は1,000人から2,000人以内の人口規模であり、さらに日常生活の範囲では30戸ないし40戸の農家集団からなるToが単位となる。農村の自治組織はAp以下のレベルに存在するが、「To」の起源は不明である。史料によれば、19世紀初頭の村落名一覧にXaとならんでApの集村単位は出現するが¹¹⁾、「To」は見慣れない。1975年以降の社会主義的農業への転換時に、上からの指導によって生まれた組織である可能性もある。XaおよびApの組織の具体的内容は今後の調査で明らかにしたい。

前号で述べたように、現在のベトナム社会主義共和国の8割の人口を占めるキン族は、19世紀初頭によりやく現在とほぼ同一のベトナムの政治的版図を確立した。当時のメコン・デルタを含むベトナム南圻6省に設置された地方行政組織の一覧は、漢字による県や社(Xa)の全名称を残している。フランス植民地期前後と戦後の村落名を整理したNguyen Dinh Dau氏の研究を手がかりにすれば、チャヴィン省の開拓にともなう村落の創設、および末端行政機構の約170年間における再編過程を概略つかむことができるだろう¹²⁾。

行政村の再編や村名変更は、どのような理由で、またなぜ行われたのだろうか? 19世紀の前半に急速に形成されていったベトナム・グエン朝期の総Tong(現在の県Huyen)および社は、フランス期に入っても1890年頃までは増大を続けた。社の上位レベルである総は、例えばBinh Tri総がBinh Tri Thuong総とBinh Tri Ha総に分離し、またBinh Khanh総がBinh Khanh Thuong総とBinh Khanh Ha総に分離増設されたように、規則性をもって次々に増え、13から20の総になった。しかし1890年以降1954年まで、フランス植民地政府は村落を束ねる総の数を固定し、村落そのものもむしろ整理統合し150村に再編成した。フランス植民地体制は、開墾・新村建設をすすめるために、グエン朝期からの地方統治の体制を初めは

そのまま継承・発展させ、後に開発の進展にともなう新たな社会的秩序を与えるべく統治枠組みを再編したと言えるだろう。

フランス支配が終って1955年以降1975年までのベトナム共和国時代になると、フランス時代に用いられたチャヴィンの省名は、植民地期以前のヴィンビン Vinh Binhに戻された。ナショナリズムの嵐のなかで歴史的には当然理解される。また村落の整理統合も顕著に進み、7県56村に大きく編成替えされた。19世紀末に固定された行政枠組みがもはや現実には不適性となったこと、またフランスとの独立戦争による混乱が背景にあったと考えられる。だが、150の村落がどのように56村に合併されたのか、行政機構はどのように編成替えされていたのか、そのこと自体がゴ・デイン・ディエム体制の性格を解明する材料の一つとなるだろう。

1975年以降現在のベトナム社会主義共和国時代には、前述のようにチャヴィン省はヴィンロン省と合併されてクローン省に変わった。しかし県レベル以下の末端行政は基本的に継承された。また戦後の開拓によって、この20年間に合併村を除いてカウケー県に2村、さらに県南・南西部の諸県には9つの新村が誕生した。処女地の農業開拓は、現在でも続けられているのである。

ii) 異民族の混在状況

チャヴィン省の今回の調査から、同省はベトナム人とクメール人、ハウザン河寄りの砂丘には中国人も含めて、複雑なエスニック構成をもつことが明らかになった。歴史的にみてもおよそ100年前のフランス支配期の初期においては、チャヴィン省のクメール人口はベトナム人のそれより大きかった。¹³⁾チャヴィン周辺の諸省であるヴィンロン、ベンチェでは、ベトナム人がほとんどであったことを考えると、この点の違いは明白である。

チャヴィン省のクメール人口は、1894年に、メコン・デルタ全省のなかでも最大だった(54,400人)。西部デルタの水田開発が活発化する20世紀

初頭には、西部のほとんどの省でクメール人口、および各省内に占めるその人口比は減少していた。20世紀にはいるとチャヴィン省の多数派もベトナム人になるが、第一次世界大戦直前に、チャヴィン省のクメール人口比は再び43%から46%へ微増すらしている。その要因が自然人口増か、それとも他省からの移住によるものかは今のところ不明である。¹⁴⁾

ダウ氏の史料によれば、フランス時代の史料にチャヴィン省の「クメール人村」と書かれたものは、全部で47村（全体の3割）ある。エスニック・グループの人口比では4割から5割を占めたのであるから、砂丘上のクメール人村は相対的に他村より人口規模が大きかった可能性が高い。

調査した3地域のうち、まずホアトアン村のケースでは、村内の砂丘列の中心部にクメール人の多数が居住し、少なくとも5つ以上のクメール寺院があった。これに対して砂丘の両端（もしくは村落の周辺地域）にはベトナム人が多数派である社会空間が存在していた。インタビューしたチホン部落は砂丘の中央部をやや離れた位置にあるが、現在でもクメール人口が部落の80%を占めた。村内で最大のクメール寺院のあるクイノンB部落は、100%の住民がクメール人だった。

両民族の関係はどのようなものであったのだろうか？ インタビューに応じてくれたクメール人は、祖父母と父はクメール人だが、母親はベトナム人であった。彼女（母）はクメール語がわからない。父と母は子どもたちに土地を相続する際に、ベトナム社会で一般的に行われているフンホア（香火田、祖先をまつる資とするための土地）を残したという。クメール人とベトナム人の通婚によって、社会慣習のベトナム化は比較的急速に進行すると言われている。その一つの例を見るようであった。現在、チャヴィン市の郊外にも、仏領期の建造物と見られるカトリック寺院が存在する。私達の研究チームのなかのベトナム人メンバーの話によれば、純粹のクメール人がカトリック教へ改宗する例はほとんどないが、ベトナム人の血が少しでも混じると、キリスト教への改宗は容易にすすむ傾向があると

いう。

またこの部落のベトナム人の両親をもつ男性が、子供のときからクメール寺院でクメール語を学び、寺を通して部落社会で共生するさまも興味深い。彼は、息子の戦死を機に、ベトナム政府から部落の村有地の一部を提供されて生活していた。彼の家は部落では余り見かけない煉瓦づくりで、家の前には農作業をおこなう小さな広場があるいわゆる「ベトナム風」だった。

2番目の調査地であったコウガン県のクメール族人口比は35%であった。これは、チャヴィン省での平均に近い。特に同県の東・東南部コチエン川沿いの地域にはクメール人が少なかった。ここの沿岸低地には、高い畦で田を囲み、大きな苗を移植する典型的なベトナム人の開拓が見られる。しかし、県の中・西部には、緩やかな弧をえがいて走る砂丘列が発達し、その上に県道やクメール人の村が帯状に並んでいた。調査した砂丘上のヒエップ村では、クメール人口比は61%に達し、県平均を上回っていた。

ハウザン河に面する西南部の諸県には、クメール人が多いという印象が強い。3番目に訪れたチャクー県のハムヤンは、古村である。この村ではクメール人は85%を占める多数民族であり、ベトナム人は12%、中国人は3%であった。少数派のベトナム、中国両民族は、日常もクメール語を話すという。ベトナム人より古くに住み着いた可能性の高い中国系の人々が、どのようにクメール人と共生しているのか、1970年代末の激動の時代をどう生き抜いてきたのか興味をそそられる。農業開拓を中心とした今回の調査では、とうてい不明のまま残さざるをえなかったのが残念である。

しかしチャヴィン省のエスニック状況を明らかにする目的は、同省の社会発展にエスニックな問題が関連あるか否かを検討する為である。チャヴィン省農業局のダイさんは、クメールの人々の暮らしが改善されるにはどのような方法があるのか助言がほしい、と率直に語っていた。クメールの人々は信仰心に厚く、寺院（上座部仏教）への寄進に熱心で、僧侶の言う

ことにしか耳を傾けない。競争を避け、社会的上昇志向をもつことなく、社会変化や近代化にうまく対応できない。その結果、所得水準は改善されず低開発に留まっている、と一般には説明される。しかしこの問題はより自然生態的条件、歴史的、社会経済的背景の中で考察されるべきであると思う。

iii) 開拓の技術

すでに(1)で明らかにしたように、チャヴィンの農業発展に深刻な影響をおよぼすのは酸性土壌の問題である。潮水の浸入は、農地の生産性を低水準にとどめる重要な問題であった。チャヴィン省の農業改良事業は、ハウザン、コチエン両河に注ぐ河川や掘削した水路に水門を設置して乾季の潮水の浸入を防ぐことをめざしている。同時にハウザン河やヴィンロン省の自然河川の真水を引き込む運河を建設して、乾季の灌漑用また雨季の排水にも利用する。こうしたいわば、「農業の工学的適応」の試みは、今回の調査では戦後（1975年以降）にベトナム政府によって推進されたという説明を受けた。

メコン・デルタ西部の氾濫原は、フランス植民地時代に、大規模な運河が積極的に掘削され、また農民が地域の生態的条件にあったコメの品種を選択する事によって、輸出用の稲作地が一挙に拡大した。それに対してフランス時代のチャヴィン省では、交通路としての若干の運河の掘削は見られたものの、コメの増産をめざす運河の建設はほとんどなされていない。フランス植民地政府が、土壌の問題からチャヴィンの農業生産の非潜在力を考慮し、当初から開発投資を放棄していた可能性がある。

チャヴィンの低地平野の稲作は、前述のように高い畦で田を囲み、雨季の十分な降雨で酸性土壌を洗浄してから苗を移植する「伝統的な」農法（雨季稲 Lua Mua）に依存している。このような農法は、いつごろから、どのようにして始まったのであろうか？

土壌の酸性度の低い土地では、最近の灌漑水路の建設のおかげで乾季の稲作（冬春稲 Dong Xuan）が可能となった。さらに新品種である、雨季の初めに作付し短期収穫型の稲（夏秋稲 He Thu）も導入され、条件の良い土地であれば、伝統的な雨季稲も含めると3期作も夢ではなくなった。ただし、このような土地は省の北部ヴィンロン省寄りか、内陸部の狭い範囲にしか存在しないだろう。

すでにみたように、土壌が潮水に侵される地域は、省の南に行くほど多くなる。省の南部は砂丘列が発達し、クメール人口が多い土地であった。自然条件の悪さが、クメール人社会の生産力発展の決定的な阻害要因になっているのである。

このことに関連して、筆者はフランス植民地時代の同省の水田面積の推移にも注意を払っている。19世紀末から20世紀初めにチャヴィンのクメール人口は前述の通り増加するが、同時に水田面積も多いに増加した。世紀転換期に年平均1,300ha以上も増えた計算になる。チャヴィン省はこの時、早咲きの「開発ブーム」の時代¹⁵⁾を迎えていたと考えることもできよう。しかし1908年から1930年の時期には、この増加率ははやくも失速している。1930年頃のチャヴィン省は、メコン・デルタ中部でミトー省と並び最大の16万haの水田面積を誇っていた。歴史的に見れば、筆者は、チャヴィンの開拓は、この時点ですでに当時の農業技術力の水準では限界点に達していたのではないかと考える。そして1930年代以降には、基本的には農業開発は停滞したまま戦乱の時代をすぎ、1970年代を迎えたのではなかろうか？

今日、コメの増産への努力と並んで、政府はメコン・デルタ全域で農業の多角化を推進している。コメづくりに特化するのではなく、モデル農家はどこでも、多種類の作物栽培、養豚、養鶏、養魚などに取り組むよう政府に指導されている。ドイモイ政策の下で、自家用の、あるいは市場向け生産が奨励されているわけである。大都市や地方都市をひかえた近郊農家では、水田を消費地向け野菜や果樹栽培用地に転換し、現金収入を増大させ

た例も出ている。インタビューした調査農家はチホン部落を除くと、両方とも新しい彼らの開拓地でそのような指導にそって努力していた。しかし、チャヴィン省における交通手段の不十分さや流通過程の未組織、農業技術の現状を考慮すると、市場化は依然としてはるかな目標に留まるようだ。市場経済の導入をはかるためには、農業の多様化に対する政府の手厚い援助政策は欠かせない。経済社会の基盤整備や、同省の諸条件に合った、生産技術、流通、市場の創造に人々の英知を結集させるべきである。戦後のチャヴィンは、行政府の積極的な運河建設のおかげで再び開発の時代を迎えた。しかし、ドイモイ政策下の現在のチャヴィン省は、開発投資不足のまま、独自の農業開発の方向性を、まだ十分に見いだしていない。

iv) 砂丘村落の人口圧

インタビューに答えたクメール農民は、いずれも土地保有の細分化の問題について述べていた。とりわけ多数の子どもへの均分相続の結果、祖父母の時代と比較すると、さらに現在の核家族の保有地は、零細地片になってしまった。¹⁶⁾ インタビューのなかで述べられたように、昔は家長の所有地を複数の子どもの家族が互いに共有しながら生活を立てていたという。近代的土地権の明確化は、個人の権利を保証はするが、一方では相互扶助の慣習を喪失させていく。¹⁷⁾

沿岸複合地形における居住・生産空間としての砂丘上の土地は、人口増加でますます過密化し、土地を保有できない無産農民が析出されていく。土地を全く保有せず、農業労働力を提供して生計を保持する農家が、チャヴィン市近郊のチャウタイン村でもすでに農家全体の23%を占めた。インタビューした農民が嘆いたように、彼の息子たちは相続に頼るだけでは家族を養う農地を持つことはもはやできない。1年に3カ月以上食料不足状態に陥る貧農・土地なし層は同村の54%に達していた。

従来もっとも快適な居住空間を提供していた砂丘上から、低地への入植

をすすめるために、政府の積極的な斡旋がこれからも不可欠である。その際に、資本のない開拓者に対する資金援助は、是非なされる必要があるだろう。筆者は、小農民向けの利用価値の高い、返還の容易な農業金融制度をもっと充実させるべきだと思う。また前述のように、農業の悪条件を取り除くための自然の大改造には、技術や大きな資本が不可欠である。現地で、最近オーストラリアが、チャヴィン省の運河建設の援助を行っていると聞いた。このようなアジアのデルタ辺境の地に、日本も人々の役に立つ真の援助をしてほしいと思う。

勿論、農業以外にも新たな雇用創出策がとられない限り、人々の暮らしは改善されて行かないだろう。

以上、1995年8月の調査から得られたデータを基に筆者なりの考えを述べた。チャヴィン省の農業社会の問題がようやく垣間見えてきたと同時に、問題解決の難しさも理解できる。たとえば、メコン河は国際河川であるから、メコンの水資源の開発は流域関係諸国の合意の下になされる必要があるのは勿論だが、たとえ国家レベルの協定が得られた開発であっても、上流の国ぐにの開発がメコン河の流量を減少させることになれば、河口に位置するチャヴィン省の人々の真水による低地灌漑の成果は泡と消える可能性もある。

19世紀後半以降の近代開発のなかで、デルタの辺境としての歴史性を刻印されたチャヴィンの多民族社会が、今後どのような歩みをたどるのか注目したい。次年度の再調査を通して、チャヴィン農村社会の歴史的特質をさらに究明したいと思う。

謝辞：チャヴィン省の現地調査に応じて下さったすべての農民の皆さんや、省・県・村の政府関係の方々のご協力なしに本稿は存在しない。ここに記して、心から感謝の意を表したい。

- 注 1) 本学術調査は、メコン・デルタ開発の基盤となる農村社会を理解し、開拓の歴史過程を明らかにするために、その自然生態的諸条件、歴史・社会経済的諸条件を総合的に研究することを目的としている。調査はデータ収集のため、①デルタ各地の農村実態調査と、②ベトナムおよびフランスの公(古)文書館を中心とした文献史料調査の2方向から行っている。研究組織は、桜井由躬雄(東京大学文学部教授、ベトナム史)、中村圭三(本学教授、自然地理学)、河野泰之(京都大学東南アジア研究センター助手、農業水利学)、グエン・フー・チュム(ベトナム、カントー大学講師、土壌学)、筆者(研究代表者:本学助教授、ベトナム史)等から構成した。1995年夏の当該調査には、桜井をのぞく全員と数名の研究協力者(田中耕司:京都大学東南アジア研究センター助教授、作物学、大野美紀子:ホーチミン市総合大学研究生、ベトナム史、今村宣勝:東京外国語大学大学院生、ベトナム現代史)も同行した。
- 2) クメールKhmer族(自称)は、12世紀を頂点に前後6世紀にわたり栄華を誇ったアンコール帝国の末裔である。その居住領域は広くメコン・デルタに及んだ。18世紀以降のベトナム人の南進により、ベトナム領メコン・デルタに残ったクメール人の、この他の呼称としてCur、Cul、Cu、Tho、Viet goc Mien、Khome、Krom等があるという。今日のベトナム国家がベトナムを構成している諸民族として認定している54民族のなかの1つである。(古田元夫『ベトナム人共産主義者の民族政策史——革命の中のエスニティー——』大月書店、1991年、p.34および巻末の表)
- 3) 管見の限り、チャヴィン省の地方史を掘り下げてその社会の過去、現在、未来を透視する研究はまだ成されていない。ベトナム政府が公表した諸統計や見解を用いて、ベトナムの現在の農業全体を論じる最新の著作として、Benedict J., Tria Kerkvliet and Doug J. Porter (eds.), *Vietnam's Rural Transformation*, Institute of Southeast Asian Studies, Westview Press, Singapore, 1995を掲げることができる。なお筆者の前掲は、「歴史的視点より見るメコン・デルタの農業開拓:1995年夏の現地調査報告」千葉敬愛短期大学国際教養科紀要『国際教養学論集』第5号、1995年、133-168頁。
- 4) 彼は北部ベトナムのナムディン省出身である。ベトナム戦争を戦い抜き、1975年の解放後には南に残った。チャヴィンの女性と結婚して、ここに定住した。メコン・デルタ各地の省政府の機関では、彼のような統一ベトナム成立後に南部に配置された北部出身者に会おうことが多い。
- 5) Nguyen Dinh Dau, *Nien Cuu Dia, Nghien Cuu Dia Ba Trieu Nguyen, Vinh Long, Nha Xuat Ban Thanh Pho Ho Chi Minh, Vietnam, 1994, p.113.*
- 6) チャヴィン省の雨季は5月頃から11月頃まで、乾季は12月から4月まで

である。

- 7) 平均降雨量は年1,400mmで、メコン・デルタ全省の平均である1,600mmと比べると少ない方だ。年間の総降雨日は平均113日である。同省北部のカンロン県は最大で118日、最南部のズエンハイ省が最低の77日である。
- 8) Nguyen Huu Chiem, "Geo-Pedological Study of the Mekong Delta," 東南アジア研究, 31巻2号, 1994年, p.163.
- 9) チホン部落は、1988年以降の土地使用権に関する10号決議の実施モデル地区であったようだ。10号決議には、ベトナム政府によるドイモイ下の具体的な農業改革のための重要な内容がもりこまれている。つまり、それまでの集団農業中心から生産単位としての個人農家の認可、長期に渡る土地使用権の認可など、市場経済の利点を取り込むための改革の重要な点が示されている（前掲の拙稿, 159頁参照）。
- 10) サイさん夫婦の子供たちに対する教育は驚くほどしっかりしている。家の中には家族の毎日のスケジュールが細かに決められ、タンスに貼ってあった。勤勉と学習をモットーに子供達は黙られていた。飾ってある写真を見て、夫婦は共産党員であることがわかった。ここも、開拓農民のモデル・ケースと見ることができる。
- 11) Nguyen Dinh Dau, *op,cit.*, p.82.
- 12) *Ibid.* 前掲書によれば、1820年頃のベトナム阮朝統治下のヴィンビン Vinh Binh 省（チャヴィン省の前身）には、2つの総（Tong）が含まれその中に100村が成立していた。その後フランスの植民地支配が始まる1868年には、そのあたりはラックホア Lac Hoa とよばれて Tuan Ngai 県と Tra vinh 県があって、各県に5総ずつ、合わせて200村となった。チャヴィン Tra Vinh の名称の由来は不明。ベトナム人による活発な開拓、新村建設が19世紀半ばにかなり進んだことが推察される（高田「メコン・デルタの開拓」池端雪浦編『変わる東南アジア史像』山川出版社, 1994年, 所収論文参照）。約半世紀の間に、阮朝の統治村落数はほぼ2倍になった。
- 13) 1876年のチャヴィン省の64,733人の民族別構成は、ベトナム人25,700人、他にベトナム登録民2,227人、クメール人32,000人、他にクメール青年男子3,445人、中国人1,360人、ヨーロッパ人1人である。登録された田畑もわずかに26,213haである（Nguyen Dinh Dau, *op, cit.*, pp. 92-3）
- 14) *Annuaire Général de l'Indochine, Cochinchine*, 1894, p.347, および同誌 1913, pp.299-337を参照。同史料からチャウドック省もチャヴィンの状況に似た傾向をもっていたことがわかる。
- 15) いわゆるフランス植民地支配期の「開発 Mise en Valeur の時代」とは、1920年代の好況期にフランス本国資本が本格的にインドシナに導入された頃をさす。その要因、背景、内容について、詳しくは高田洋子「フランスが来た。そして・・・」桜井由躬雄編『もっと知りたいベトナム』弘文堂

(1987年)を参照されたい。

- 16) フランス時代のチャヴィン省各県の土地所有については、1920年代の終りに実施されたフランス植民地政府の農業調査からある程度の状況が把握できる。端的に述べれば、メコン・デルタ新開地に見られた大土地所有の傾向に反して、チャヴィン省の土地所有状況は、圧倒的な小規模所有であった。1ha以下の零細な土地所有者が、土地所有者全体の45.6%を占めた。それはベンチェ省と並んでデルタ全省で最も高い比率である。同省の土地所有者のうち5ha未満の層は全体の80%を越えている。零細所有の傾向が著しかったのは、カンロン区の Binh Khanh とバックチャン区の Thanh Hoa Thuong, そしてチャウタイン区の Tra Phu に見られる。ただし同じカンロン区でも、Binh Khanh Thuong では10haを越える規模の所有者数が全体の20%に達している。同区は所有の階層差が大きい地域であったことがわかる。Yves Henry, *Économie agricole de l'Indochine, Hanoi, 1931, pp.176-177.*
- 17) この点に関連して、フランス期のチャヴィン省の土地所有についてさらに気になる点は、同省の公田面積の少なさである。公田とはベトナム王に帰属していた国家の田である。公田は、クメール人口比がチャヴィンと同様に高いチャウドック省と比べてもその3分の1に満たなかった。(Yves Henry, *op. cit.*, p.157 および p.598.)。一方フランス植民地期以前の漢文史料によれば、阮朝の時代のチャヴィンの公田面積は、周辺和省と比べても、逆に非常に大きかったのである。その変化は一層興味深い。今後の研究過程で追求したい点である。

The Ethnic Khmer in Travinh Province
Based on Field Research in the History of Agriculture
in the Mekong Delta, 1995

Yoko Takada

The Khmers or Cambodians in Vietnam, numbering about 900.000 (1994), today live in particularly remote areas in the Mekong Delta. They were native in the southern Vietnam before settlement by other ethnic peoples. This paper discusses a number of agricultural problems of the Khmer, situations within their hamlets and societies as they attempt to coexist harmoniously with the Kin (Viet) and Chinese in Travinh province. The paper is based on field research done by the writer in 1995.

Travinh province occupies one part of an enormous sand bar between the Haugiang and Cochien Rivers, characterized by complex coastal landforms containing subunits, such as sand ridges, coastal flats, Inter-ridges and mangrove swamps. The Khmer typically inhabit on sand ridges running parallel to the coastline, which are generally the highest altitude in the area, and they use the steep slopes for agriculture.

The writer did field research in the Khmer system of agriculture through personal interviews. Questions included those on natural conditions, land use, irrigation work, ethnic cohabitation in the same hamlet, rural institutions, village history, newly immigrated frontiers, and recent socio-economic changes in different villages of three

districts.

After reporting the effects of this field research, the writer discusses the results giving special attention to the following points: (1) Historical reorganization of social institutions, (2) Cohabitation of ethnic varieties, (3) Agricultural technics for development, and (4) Troubles caused by population increase on sand ridges in Travinh province.